

【目的】既報において、幼児の栄養知識を特に食品の名称や働きの側面から把握し、若干の知見を得ることができたが、本研究では、さらに、栄養知識の総合的認識の場として、食事場面をとらえ、幼児の栄養知識の習得と食行動の関連について調査を実施したので報告する。 【調査方法】①時期：1992年12月 ②対象：某女子短大附属幼稚園園児（年長組：5,6才）50名（♂20名，♀30名）及びその母親 ③内容：“最も幸せに感じる食事場面”の5W1Hについて ④方法：母親による聞き取り調査（母親には、質問紙の配布、回収） 【結果及び考察】①幼児はA.いつB.どこでC.誰と：夕食を家族と一緒に家庭や外で食べる食事、友だちと食べる幼稚園での給食（昼食）D.何を1：好きなもの E.何を2：洋風料理、とくに、ハンバーグ、カレーライス、ステーキなどが好まれている。 F.どのように：話ながら、あるいはTVを見ながら G.なぜ：楽しいから食べる食事を選択する傾向にある。 ②いずれの項目も、母子間の有意差が顕著であり、食事場面の伝承に変化がみとめられる。 ③全体的に、「栄養」や「健康」という認識が希薄であるが、女兒の一部には浸透しており、家庭における食事のしつけ（料理作りや後片付けも含む）とも関連して、「栄養」や「健康」に対する意識を高揚する必要がある。 ④また、食事の「楽しみ」や「家族団らん」といった幼児の心を育む食の役割についても再認識すべきであろう。 ⑤子どもたちが、楽しみにしている給食の場そのものを食教育の場として、どのように位置づけるか、あるいは、他の機会に受ける食教育とどのように連携するか、即ち、栄養知識と食行動をどのように結び付けるかということが今後の大きな課題であろう。